



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	A Life Lived Punk : Live Music and Intergenerational Relationships in Aging Japan
Author(s)	レットソン, ジェームス デウィー
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16978号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16978
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99822
Type	doctoral thesis
File Information	James_Letson_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：レットソン ジェームス デウィー

審査委員	主査	准教授	コーカー	ケイトリン	クリスティーン
	副査	教授	小田	博志	
	副査	教授	村松	正隆	
	副査	教授	クリーン	スザンネ	（高等教育推進機構）

学位論文題名

A Life Lived Punk: Live Music and Intergenerational Relationships in Aging Japan
（パンクとして生きていた人生——高齢化日本におけるライブ音楽と世代間交流）

・当該研究領域における本論文の研究成果

世代間の関係性に関する人類学として位置づけられる本論文の研究成果は次の通りである。第一に、優れたフィールドワークから得られた実証的なデータに基づいて、これまで取り上げられてこなかった札幌パンクのコミュニティを生き生きと描いたエスノグラフィである。第二は、札幌パンクのコミュニティ内部の世代間の関係性がいかに続いてきたかを考察することで、世代間の関係性に関する人類学に新たな視座および可能性を切り開いた点である。第三は、パンクのコミュニティから主流社会がどのようなことを学びうるかを提示し、高齢化が加速し、プレカリティ（不安定な状態）が増大する中で、社会的な安全性を与える関係性がいかに生成し継続できるかという知見を提供していることである。

第一に関して、本論文の研究は、著者が学部時代から継続した7年間のフィールドワークに基づく力作であることが高く評価される。その過程で、著者は研究協力者に途中の研究成果を共有し、フィードバックを得ながら、帰納的手法に基づく実証研究を積み重ね、説得力ある成果を導いている。札幌のパンクのコミュニティは日本社会における人類学研究や世界各地のパンク文化研究においても独自の現象であるが、本論文では初めてその成り立ちと継続が明らかになった。また、人類学におけるフィールドワークの方法論を再考できるほどの質の高い研究である点も評価できる。

第二に、このコミュニティ内部の世代間の関係性を分析し、考察することで、本論文は世代間の関係性に関する人類学に理論的な貢献ができています。先行研究が世代間の関係性を血縁関係／非血縁関係、利害／ケアとして整理してきたが、本論文ではその交差点にある関係性の可能性を示した。また、従来の研究が関係そのものを意味や機能として認識論的に収斂させてきた点を指摘し、生態学的な生成過程に注目する存在論的な視座を提示していることが大きな理論的な貢献である。

具体的には、この生成を「プロセス（過程）」「パワー（権力）」「エフェクト（効果）」という側面から分析している。このコミュニティにおいて実践が第一義的な位置を占める過程で、ケアのコミュニティが存在すると同時に、世代を横断する関係が形成されると論じる。「パンクとして生きる」ことを通して、ピエール・ブルデューのいう社会的な重力が蓄積され、それが個々人にとっての一種の権力として立ち上がると同時に、パンクのコミュニティへと結びつける力、すなわち「錨」になると論じている。これらのエフェクトによって、差異を曖昧化しつつ交渉する自由が得られるヘテロトピアが形成されていると論じる。例えば、コミュニティ内の「先輩」と「後輩」の関係は、社会的なヒエラルキーの実践よりも、相互的支援を優先する関係として再想像されていると述べている。

以上の分析と考察は、パンクのコミュニティのエスノグラフィとして、また人類学における理論的發展として意義がある。さらに本論文は、高齢化が加速する日本社会において、世代間の関係

をいかに促進できるかという応用的示唆を与えている。血縁関係／非血縁関係や利害関係／ケアという二項対立にとらわれず、その交差点にあるコミュニティが社会的な安全性を提供できる可能性を示している点、また実践に基づく生き方から自発的に生起する影響力とオルタナティブな世界という希望を提示している点が評価できる。

・学位授与に関する委員会の所見

上記のように、本論文の実証的研究の質の高さと、研究成果が明瞭に記述されていることが高く評価された。また、本論文の研究はすでに三つの学術誌に査読付き論文として掲載されている。一方で、審査委員からは、本論文の結論が最初から決まっており、その中でパンクのコミュニティにおける関係性が理想化・肯定化しすぎているのではないかという疑問が提起された。これに対し、著者は口頭試問において、帰納的なフィールドワークから明らかになった結果であることを説明し、表層の裏にある複雑な側面を今後の課題として描き出す必要性を的確に述べた。以上より、これらは主に記述上の問題にとどまり、本論文の価値を損なうものではないと認められ、審査委員会は一致して本論文が博士（文学）を授与することが妥当であるとの結論に達した。